集落営農かわら版

平成２６年１月１日　VOL.２１
大分県西部振興局農山村振興部
大分県集落営農推進西部支部

２５年産水稲の反省と２６年産の対策

２５年産の水稲の作況指数は大分県で９６、西部地区では９４と大きく低下しました。県内では北部地区が９５でした。近隣の県を見ると、福岡県筑後が９４、佐賀県で９４といずれの地区も平年を大きく下回っています。それらの要因と併せて、２６年産の対策についてもまとめてみましたので参考にして下さい。

１　平成２５年産水稲の状況

２５年は梅雨明けが平年より早く、７月上旬に天候が回復しました。７月、８月と高温、好天が続き草丈は平年並、茎数は平年をやや上回りました。但し、いもち病が出やすい気象条件が揃い、一部で７月に葉いもち、８月下旬頃から９月には穂いもちが多発生しました。また、８月下旬から９月初旬にかけて日照不足になり、総籾数が平年より多かったため、極早生品種（ひとめぼれ）では登熟がやや不良となりました。いもち病の発生や、トビイロウンカ(秋ウンカ)の８月下旬からの坪枯れ被害もあり収量、品質が低下しました。また、天水掛かりの水田では、９月に降雨がほとんどなく枯れ熟れ状態になったところもありました。これらのことから、収量も低下し、粒張りが悪くなり、網下米（ほた）も多く作況指数以上に収量が下がったと感じた生産者が多くなったようです。

（写真）トビイロウンカによる坪枯れ水田

中生品種（ヒノヒカリ）は、登熟期間中に高温に遭遇せず、いもち病やトビイロウンカの影響はありましたが、登熟は順調でした。ただし、総籾数が平年よりやや多かったため、粒張りは悪く、網下米が多くなったようです。

また、掛け干しでは、９月１０月と好天が続いたため、過乾燥になったところも目立ちました。

こういった状況ではありましたが、施肥量を見直して、こまめな追肥で２４年産より収量が向上した生産者もいます。九重町飯田地区では、収量・品質とも２４年産を上回り、１等米比率も９５％を超えました。これは、水が十分ある地域で、高標高地ではあるが気温が高かったため、登熟が向上したと推察されます。

西部地区だけが特に悪かったわけではありません。でも、気象条件は変えることは出来ませんので、こういった気象条件の中でできることから取り組みましょう。

２　２６年産水稲の対策

（１）土づくり

高温障害に耐えるためにも堆肥の投入などによる土づくりが大切です。ただし、生の堆きゅう肥を大量に入れることは逆効果となります。完熟堆肥で１．５ｔ～２ｔが適量です。稲を毎年のように倒してしまうほ場はケイカル、ミネラルＧなどの珪酸質資材を使用しましょう。

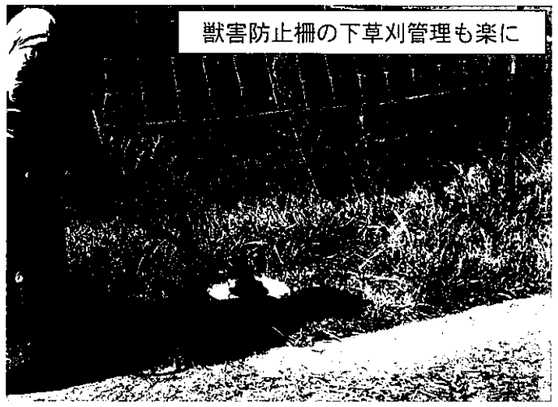
畦畔等法面緑化情報

畦畔、農道などの草刈作業の労力や時間を軽減するため、畦畔等法面緑化の実証を行っています。

①芝（センチピードグラス）を定植したり、吹付したりする方法

約３年間で定着し、草刈回数が少なくなり、畦畔や農道などの草刈が楽になります。

ムカデのように延びて広がります

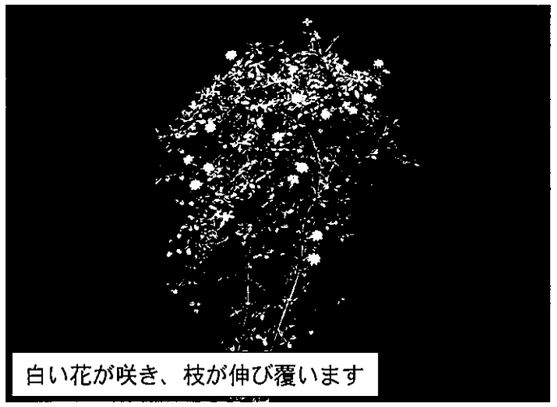


獣害防止柵の下草刈管理も楽に

日田市小野谷、月出町や求来里、玖珠町古後など各地で取り組んでいます。

②ヒメイワダレソウを定植、繁茂させる方法

抑草シートを敷き、苗を植えるので資材費がかかりますが約１年で定着します。



白い花が咲き、枝が伸び覆います

日田市の朝日地区などで取り組んでいます

新対策について

平成26年の水田農業関連の新政策については、米価の下落に対応できる農業者の経営力強化と、担い手と連携した農地・農村の保全体制の強化という方向性が伺えます。「人・農地プラン」の作成などを通じ地域の現状把握と問題点の整理を進め、政策を有利に活用できる体制づくりを進めましょう。

作成・発行　大分県西部振興局農山村振興部　集落・水田班
監　　修　大分県集落営農推進西部支部
TEL：0973-22-2585　FAX：0973-23-2219

（2）田植準備

畦からの漏水、ほ場の均平不足が除草剤の効果を不十分にしてしまいます。畦塗り、畦シートなどの活用により畦からの漏水を防ぎます。代かきは均平を心がけましょう。

（3）施　肥

元肥一発型の肥料（エムコート、セラコートなど）を使う水田が増えており、高温年には、早く溶脱して後半の窒素不足が心配されています。施用時期と田植の間隔を空けすぎると早く溶脱します。追肥を考える方は、元肥と穂肥と分けて施肥することをお奨めします。また、側条施肥では、２０％程度減肥しましょう。

（4）品種選定と健苗育成

今栽培している品種は、地域にあってますか？農薬散布や水管理をしやすくするために、できるだけ品種はまとめましょう。また、苗半作といわれるように苗は稲の出来不出来を左右します。健苗育成に努め、苗の準備は田植えから逆算して開始するようにして、田植えを必要以上に早くしないことも高温障害対策になります。

（5） 苗箱施薬

地域によって使用する薬剤が異なりますが、できるだけ前日には散布を終え、上から十分散水しておきましょう。稚苗、中苗では箱当たり５０ｇの使用量を厳守しましょう。使用量が少なかったり、当日慌てて散布して、散水を怠ると十分な効果が発揮できません。

（6）除草剤散布

初中期の除草剤はヒエの葉齢で散布時期が決められています。ヒエが大きくなりすぎないうちに適期に散布しましょう。また、初中期除草剤で効果が不十分だった場合、田植後３０日～４０日を目安に後期除草剤散布を行いましょう。※雑草が大きくなりすぎると後期剤でも効果が出ません。

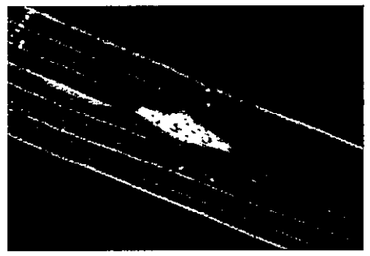
（7）病害虫

施肥量を適量にすることが第一です。窒素が効き過ぎると稲が柔らかくなり、病気が出やすくなります。また、害虫からも狙われやすくなりますので、堆肥も含めて適量の施肥が望ましいです。

①いもち病：カビの一種です。種子消毒、苗箱施薬、本田防除で抑えます。発生量は天候に左右されますが、予防が大切です。まずは多肥栽培をさけ、健苗育成に心がけましょう。

②稲こうじ病：多肥栽培したり、前年に発生が多いと翌年の発生が多くなります。農薬だけでは十分な効果が得られないことが多いので、まずは施肥量を見直しましょう。その上で、農薬散布を考えましょう。

③ウンカ類：トビイロウンカは、９月以降の高温と少雨によって、被害が大きくなります。８月中旬以降に水田を必ず見回って発生量を確認して下さい。早急な防除が必要なときには病害虫発生予察警報が出ます。十分注意して下さい。



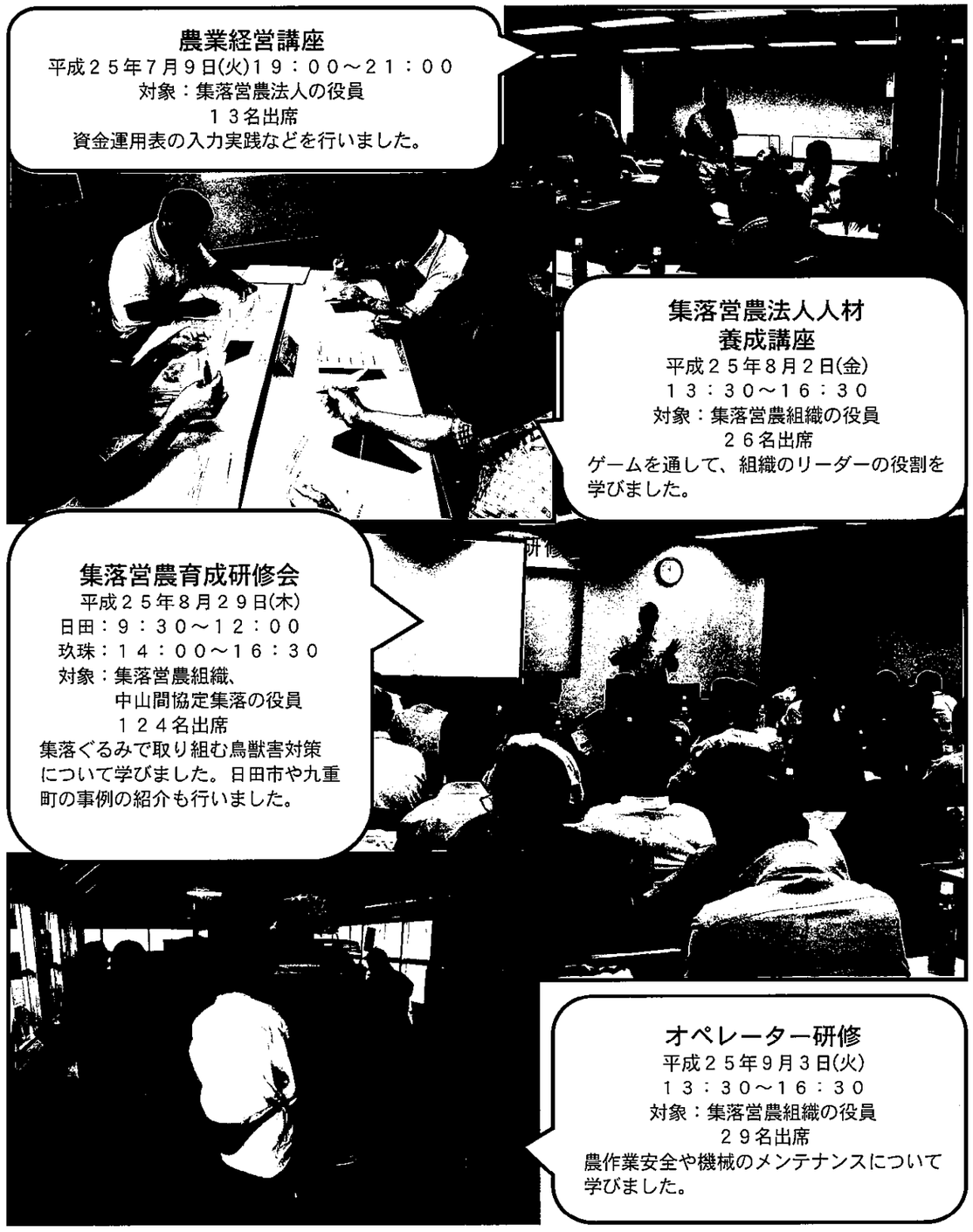
いもち病

稲こうじ病

トビイロウンカ(短翅型雌成虫)

（8）水管理

基本管理は間断灌水です。中干しもきちんと行って下さい。昨年のような高温年は、水が十分確保できる地域では、出穂後の通水も有効です。なお、落水時期が早すぎると米の品質低下が著しくなりますので、できるだけ収穫直前まで土壌水分を保ちましょう。

平成25年度に実施した研修会内容のご紹介

大分県集落営農推進西部支部では、集落営農の推進や集落営農組織の経営強化を目的として様々な研修会を行っています。今年度、これまでに開催した研修会の様子を紹介します。